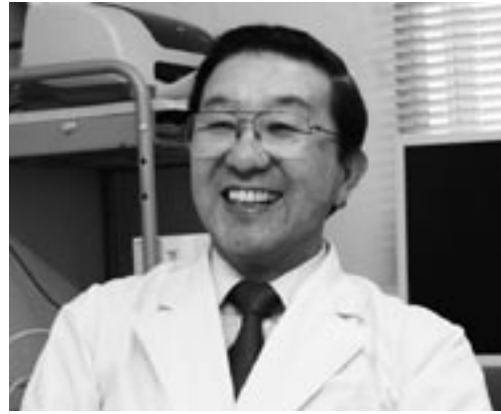




なかにしことよし 中西載慶さん

東京農大第一高校・同中等部校長



1947年長野県生まれ。東京教育大学農学部生物化学工学科卒、同大学院修士課程修了。農学博士。東京農大短期大学部醸造学科教授。同大学短期大学部長、副学長などを歴任。専門は、応用酵素学、バイオプロセス学。主な著書は、「インターネットが教える日本人の食卓」東京農大出版会、「食品製造」・「微生物基礎」実教出版など。

本誌に、シリーズ「身近な物質」を執筆している。アルコール、塩、水、アミノ酸…。最新の知見に加え、それぞれにまつわる故事来歴、詩歌も織り交ぜて、なかなかの文章家である。

東京農大短期大学部醸造学科教授にして、昨春から、東京農大第一高校・同中等部校長を兼務する。中等部は4年前に創設されたばかりだ。

「30年以上、大学の研究・教育に携わってきた身にとって、新鮮かつ刺激的な日々です。中学・高校時代は、やはり基礎学力、つまりは生きる力をしっかり培うことが大切。自らの可能性に挑戦し、それぞれの潜在能力を発見できるように。重い責任を感じています」

穏やかな笑顔で、通すべき筋は通す。生徒たちはもちろん、保護者の信頼も篤いことだろう。

長野県坂城町の古刹に生まれ、祖父が与えてくれた名は「載慶」だったが、役場が戸籍を誤記して、「載慶」に。面倒だから、そのままにというところは、おおらかで、微笑ましい。

理数だけでなく、好奇心が旺盛で歴史も好きだった少年は、地元の名門・上田高卒後、東京教育大（現、筑波大）農学部へ。今で言うバイオテクノロジーの学科だ。主任の小林達吉教授（現、名誉教授）の教えは、忘れることができない。

「エネルギー源として石油全盛の当時において、先生は、石油が枯渇する時代を見通しておられた。今から、石油に代わる新たなエネルギー源の研究を。そう示唆してくれました」

筑波大助手、山梨大助教授などを経て、1991年（平成3）4月、東京農大短期大学部に招かれ、醸造学科食品微生物学研究室の創設に主任として参画した。

「自らの可能性に挑戦を」 教育に研究に、柔軟な発想

この間も、「恩師」小林教授の示唆による木材セルロースの有効利用、とりわけアルコール発酵の研究に没頭することになる。

「心の燃料、つまりお酒の研究から、車の燃料まで。雑草のセルロースからアルコールをつくる研究にも取り組みました」。分解が難しいセルロースを相手に、実用化にはまだまだ課題が多いが、今、世界中が血眼で取り組むバイオマスとして、雑草アルコールは夢の膨らむ話ではないか。

東京農大では、短期大学部長、学生サービスセンター長、副学長などを歴任した。柔軟な発想で、「農大カミングデー」創設の仕掛け人であり、「食と農の博物館」設立にも尽力し、博物館内の「カフェ・プチラディッシュ」の名づけ親でもある。

国立大育ちの身から見て、東京農大の研究環境を「試験管から農場まで」と評す。つまり理論から実践まで、幅広い分野の研究者がそろっていて、持ち前の好奇心が大いに刺激された。そこに積み上げた研究成果に対する自負でもあろう。

ところで、ご自身、アルコールはいける口でしょうか。

「ええ、毎晩。ただし、缶ビール1本。心の燃料は、微酔、半酔、ほろ酔いで十分です」

（文・秋岡伸彦、写真・神本洋治）